小児慢性腎炎の薬物療法に関する研究 ーまとめー

北 川 照 男
日本大学医学部小児科

奥村班員は,抗TBM抗体産生ハイブリドーマをマウスの腹腔内に投与すると,低分子蛋白尿を排泄する間質性腎炎を惹起するのを証明し,更に腎炎を発症するには抗TBM 抗体の量や投与期間が十分である必要があると述べている。また遠藤班員は,ラットのpuromycin aminonucleosideネフローゼ(PANネフローゼ)の発症に活性酸素が関与している事を明かにし,ラットの糸球体のadenosine deaminase(ADA)活性がマウスやモルモットよりも高いことが,ネフローゼの発症と関係ある事を証明した。鹿取班員は,インドメタシン(IDM)を加えたcollagenで膜を作ってアルブミンの透過性を調べ,アルブミンにIDMを加えてcollagen 膜の透過性を調べて,何れも蛋白透過性に変化なく,ラット,健常人,IgA 腎炎患者の血漿にIDMやAzapropazone を加えて電気泳動を行っても,蛋白の泳動パターンに変化のない事を証明して,非ステロイド抗炎症薬によって血漿蛋白に荷電変化を生ぜず,これらの腎炎の尿蛋白減少効果は他に求めるべきであると報告した。本田班員は,ヒト増殖型糸球体腎炎7例に50-100mg/日のIDMを投与し,4例に蛋白尿の減少を認め,IDMが馬杉腎炎ラットでも蛋白減少効果を示すことを証明し,馬杉腎炎ではIDMが糸球体の細胞増殖を抑制し,GFRを低下させて尿蛋白を減少させる可能性を示唆し,基底膜のcharge barrierの変化にもとずくものでないことを明かにした。

大熊班員は,正常ヒト血小板および好中球に対するdilazep(DZ)のin vitroの作用を検討し,platelet activating factor(PAF)による凝集を抑制し,血小板,好中球単独および両者が混在した状態におけるlipoxygenase系アラキドン酸代謝(AA代謝)においては,外因性AA 代謝を亢進させるが,内因性AA代謝を阻害して,leukotrieneの生成を阻害することを明かにした。

成田班員は,家兎急性血清病腎炎における各種抗血小板薬の効果とその作用機序を研究し,platelet activating factorが腎炎発病の一部に或る役割を演じており,免疫複合体-補体による血小板の活性化や基底膜の荷電の変化など多くの因子が,これに関与している可能性を明かにした。小出班員と大井班員は,メシル酸カモスタット(MC)がス剤抵抗性ネフローゼや妊娠中毒症の尿蛋白を抑制すると述べ,小出班員は,アミノヌクレオシドネフローゼでも同様の効果を示したと報告した。長沢班員と北川班員は,糸球体腎炎に大量γ-gl療法を行い,一過性の蛋白尿抑制効果のある事を報告し,これを維持するための後療法の開発の重要性を指摘し,更に北川班員はIgA腎症にステロイド療法が効果があると報告した。大井班員は,752例のMPGNの臨床像を解析し,小児例のうち,特に発見から治療開始までの期間の短い症例は,治療によく反応することを明かにした。香坂班員は,MPGNに血漿交換とステロイドパルス療法を試み,その有効性を明かにし,森班員は,症状を呈してから発見されたMPGNよりも無症状のうちに発見されたものの方が予後が良く,薬物療法が有効であると報告し,小板橋班員は,リポPGE_1を各種腎疾患7例に使用し,その一部に効果を認めたと報告した。

このように,本研究班では多くの新しい治療法が開発され,その作用機序の幾つかが解明された。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

小児慢性腎炎の薬物療法に関する研究 －まとめ－

北川照夫 日本大学医学部小児科

奥村班員は,抗TBM抗体産生ハイブリドーマをマウスの腹腔内に投与すると,低分子蛋白尿を排泄する間質性腎炎を惹起するのを証明し,更に腎炎を発症するには抗 TBM 抗体の量や投与期間が十分である必要があると述べている。また遠藤班員は,ラットの puromycin aminonucleoside ネフローゼ(PAN ネフローゼ)の発症に活性酸素が関与している事を明かにし,ラットの糸球体の adenosine deaminase(ADA)活性がマウスやモルモットよりも高いことが,ネフローゼの発症と関係ある事を証明した。鹿取班員は,インドメタシン(IDM)を加えた collagen で膜を作ってアルブミンの透過性を調べ,アルブミンに IDM を加えて collagen 膜の透過性を調べて,何れも蛋白透過性に変化なく,ラット,健常人,IgA 腎炎患者の血漿に IDM や Azapropazone を加えて電気泳動を行っても,蛋白の泳動パターンに変化のない事を証明して,非ステロイド抗炎症薬によって血漿蛋白に荷電変化を生ぜず,これらの腎炎の尿蛋白減少効果は他に求めるべきであると報告した。本田班員は,ヒト増殖型糸球体腎炎7例に50-100mg/日のIDMを投与し,4例に蛋白尿の減少を認め,IDMが馬杉腎炎ラットでも蛋白減少効果を示すことを証明し,馬杉腎炎では IDM が糸球体の細胞増殖を抑制し,GFRを低下させて尿蛋白を減少させる可能性を示唆し,基底膜の charge barrier の変化にもとずくものでないことを明かにした。

大熊班員は,正常ヒト血小板および好中球に対する dilazep(DZ)の in vitrono 作用を検討し,platelet activating factor(PAF)による凝集を抑制し,血小板,好中球単独および両者が混在した状態における lipoxygenase 系アラキドン酸代謝(AA代謝)においては,外因性AA代謝を亢進させるが,内因性AA代謝を阻害して,leukotrieneの生成を阻害することを明かにした。

成田班員は,家兎急性血清病腎炎における各種抗血小板薬の効果とその作用機序を研究し,platelet activatin factor が腎炎発病の一部に或る役割を演じており,免疫複合体-補体による血小板の活性化や基底膜の荷電の変化など多くの因子が,これに関与している可

能性を明かにした。小出班員と大井班員は,メシル酸カモスタット(MC)がス剤抵抗性ネフローゼや妊娠中毒症の尿蛋白を抑制すると述べ,小出班員は,アミノヌクレオシドネフローゼでも同様の効果を示したと報告した。長沢班員と北川班員は,糸球体腎炎に大量 r-gl 療法を行い,一過性の蛋白尿抑制効果のある事を報告し,これを維持するための後療法の開発の重要性を指摘し,更に北川班員は IgA 腎症にステロイド療法が効果があると報告した。大井班員は,752 例の MPGN の臨床像を解析し,小児例のうち,特に発見から治療開始までの期間の短い症例は,治療によく反応することを明かにした。香坂班員は,MPGN に血漿交換とステロイドパルス療法を試み,その有効性を明かにし,森班員は,症状を呈してから発見された MPGN よりも無症状のうちに発見されたものの方が予後が良く,薬物療法が有効であると報告し,小板橋班員は,リポ PGE1 を各種腎疾患 7 例に使用し,その一部に効果を認めたと報告した。

このように,本研究班では多くの新しい治療法が開発され,その作用機序の幾つかが解明された。